



ウィーン工科大学主催の国際学生セミナーに 建築環境デザインコースの学生が参加

【概要】

2024(令和 6)年 9 月 16 日(月)～ 9 月 27 日(金)の間、オーストリア・ウィーン工科大学日本オーストリア学術交流センターが主催した国際学生セミナーに建築環境デザインを学ぶ大学院生ならびに学部生が参加しました。

【本文】

2024(令和 6)年 9 月 16 日(月)～ 9 月 27 日(金)の間、理工学部の国際パートナーシッププログラムとして採択された派遣プログラムにおいて、本学で建築環境デザインを学ぶ理工学系研究科博士前期課程 5 名(留学生 2 名を含む)と理工学部 4 年生 7 名がウィーン工科大学日本オーストリア学術交流センター(JASEC)主催の国際学生セミナーに参加しました。日本からは、お茶の水女子大学、芝浦工業大学などの学生が参加しました。

今回のセミナーのテーマは、「オーストリアの芸術と建築における日本の足跡 Traces of Japan in Austrian Art and Architecture」でした。オーストリア・ウィーンには、日本代表団が初めて参加した 1873 年ウィーン万国博覧会以来、ヨーロッパの世紀末建築やアール・ヌーヴのスタイル(ドイツではユーゲントシュティールという)などで日本の影響が多く残されています。ウィーン万国博覧会には佐賀からも有田焼やお茶などが運ばれたと伝えられています。その結果、ウィーンの都市大改造時代に活躍した最も有名な建築家の一人オットー・ワグナーやヨーゼフ・ホフマンなどの建物には日本から受けたインスピレーションを見てとることができます。ウィーンの芸術家などにも、日本の絵画の模写などを経た作品が多くあります。また、今日では、日本の漫画やアニメなどの影響が見られます。

参加した学生たちは、JASEC のセンター長 Iris Mach 上級講師や Thomas Rief 上級講師の講義を受け、ウィーン市内の各時代の建築や美術館を見て回りました。シェーンブルン宮殿、オットー・ワグナー設計の中央郵便局やシュタインホーフ教会、分離派会館、メルク修道院などを見学し、それらの影響を自らの目線で収集し、発表に臨みました。

参加した学生たちは、今回の国際ワークショップへの参加により、単にヨーロッパの文化に触れることができただけでなく、19 世紀後半以降になって、日本への高い関心を持ち始めたヨーロッパの国々の中でも、特にウィーンが果たした役割を知ることができました。また、芸術家や建築家たちがどのように日本の文化を参考にしたのかも知ることができました。ウィーン工科大学とは、この国際ワークショップ期間中の 9 月 18 日に大学間学術交流協定を締結できましたので、佐賀大学の学生たちの交換留学も含めて、海外文化への関心が高まることが期待されます。



講義室で意見交換する学生たち



オットー・ワグナー設計の郵便局にて



ウィーン市内で Thomas Rief 先生の説明を受ける学生たち



Iris Mach 先生のシェーンブルン宮殿・日本庭園の説明を受ける学生たち